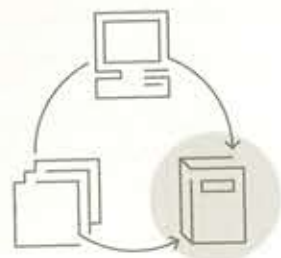


- 生命誌ジャーナル (HP)
- 2002 夏 (33号) ■ 2002 秋 (34号)
- 2002 冬 (35号) ■ 2003 春 (36号)



- BRHカード
- 33号 ■ 34号
- 35号 ■ 36号
- Biohistory 2002
- 年産末に、BRHカードと生命誌ジャーナルをまとめて年刊生命誌として発行

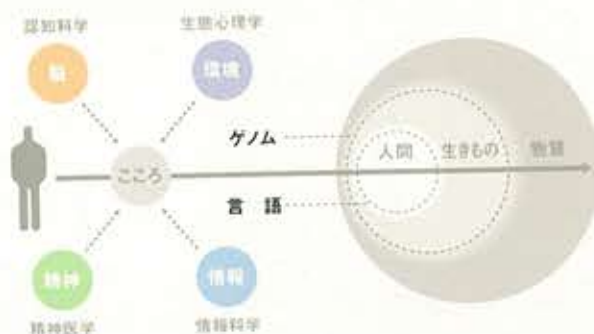
はじめに

生物研究の中心がヒトゲノム解析(塩基配列や機能の解析など)に置かれています。脳研究も重点領域です。生物学が人間理解へと向かっているということです。さりげなくこう書きましたが、これってスゴイことではないでしょうか。生物学の研究対象には人間は入っていませんでした。ミミズ、マウス…。野外での観察や実験室での解剖。人間は人類学、心理学、医学など別の学問の対象だったのです。

生命誌としては人間も40億年近く続く生きものの歴史の中で考えます。ですから、ゲノムから見える他の生物との共通性を大事にするわけですが、でも、人間は人間。他の生物と異なる特徴を持っていることも確かです。それはなにか。特別な根拠があつてのことではありませんが、「言語」ではないでしょうか。生物もすべて物質でできていると言っても、単なる物質の集合ではないシステムとしての性質を持っています。そのしなげが「ゲノム」にあるように、他の生物と人間との間の溝を作っているのは、「言語」の産物ではないかと思えるのです。

そこで、情報科学、認知科学、心理学、精神医学と生命誌との接点を探してみたところ、自ずと生まれ出てきた共通認識は、「言語」に近づき、しかもそこからまた「語ること」など、新しい課題をたくさん生みだしました。とにかく、この1年間学んできた過程は楽しかった一言につきます。それを季刊BRHカードとHPでお届けしましたが、1冊にまとめることで、さらに新しいものが見えてくることを願って、年刊生命誌(Biohistory 2002)を作りました。

JT生命誌研究館館長 中村桂子



TALK & RESEARCH

- 012 ■ 33 TALK
情報から人間を考える
辻井潤一×中村桂子
- 024 ■ 33 RESEARCH
塩基配列に隠れた情報を探し出す—生物情報学の挑戦
浅井 潔
- 026 ■ 33 RESEARCH
言語とゲノムの意外な関係
永田昌明
- 032 ■ 34 TALK
人間の脳って特別?
茂木健一郎×中村桂子
- 042 ■ 34 TALK ESSAY
クオリア—現実と仮想の出会い
茂木健一郎
- 045 ■ 34 RESEARCH
人間の条件—脳と言語、そして音楽
中田 力
- 050 ■ 34 RESEARCH
細菌に知性はあるか?
上田哲男
- 056 ■ 35 TALK
心理学の新しい流れ—生態心理学
佐々木正人×中村桂子
- 067 ■ 35 TALK ESSAY
ダーウィンのミミス研究とアフォーダンス
細田直哉
- 068 ■ 35 TALK ESSAY
環境への適応論と形づくりの論議
倉谷 滋
- 072 ■ 35 RESEARCH
ヒューマノイド・サイエンス—ヒト知能の新たな理解を求めて
浅田 穂
- 074 ■ 35 RESEARCH
コウモリと環境との対話—超音波を用いて
松村澄子
- 078 ■ 36 TALK
精神医学から人間を探る
新宮一成×中村桂子
- 089 ■ 36 TALK ESSAY
物語化する分類—現代人よ、ホメロスになろう
吉田政幸
- 092 ■ 36 RESEARCH
“こころの科学”のすすめ
鹿島晴雄
- 095 ■ 36 RESEARCH
あらたな科学哲学の再生を求めて
加藤 敏

CONTENTS

Biohistory 2002

SCIENTIST LIBRARY

- 100 ■ 33 SCIENTIST LIBRARY
チョウとがんと未知なるものと私
杉村 隆
- 108 ■ 34 SCIENTIST LIBRARY
自分の頭で考える
—ウイルス研究からがん遺伝子の発見へ—
花房秀三郎
- 118 ■ 35 SCIENTIST LIBRARY
免疫とアレルギーのしくみを探る
—常識に合わない現象には未知の真実がある—
石坂公成
- 128 ■ 36 SCIENTIST LIBRARY
哺乳類の生殖の仕組みを追う
—独創的でなければ意味がない—
柳町隆造

What's BRH

- 136 館内 information
- 137 From Lab & Sicip
- 140 研究館グッズ